

## 編集後記

今回、表紙と口絵には故・佐佐木忠慧先生の令閨・美穂子氏からご寄贈いただいた資料をあげ、巻頭には寄贈資料目録を取めた。

目録にもあるように佐佐木先生は一九五八年に本学大学院を修了され、その後ながきにわたり宮城学院女子大学の教壇にたち後進の指導にあたるかたわら、歌枕、古筆切に關する研究を極められた方である。今回ご寄贈いただいた資料は、先生がその研究生活のすべてをかけて集められた貴重な資料を中心としている。図書館への寄贈を仲介してくださった宮城学院女子大学の田中和夫先生、本学文学部院の土田健次郎先生にはあらためて御礼申し上げる。そしてなにより、思い出深い資料を将来の研究者に活用してもらえように、との思いから当館にご寄贈くださった佐佐木美穂子氏には衷心より感謝申し上げたい。目録本文でも活用させていただいているが、先生の業績のうち、古筆切に関するものを中心に『国文学古筆の考察』が刊行された。あわせて参照された。

本誌は今回六〇号の区切りを迎えた。何か特集を、とも思ったが、先年創刊五〇年を記念したばかりでもあり、今回は特にテーマを設けず、通常号として刊行した。ただ、ここであらためて紀要の原点に立ち返り、今後の指針を示したいと思う。

五〇周年記念号でも引用したが、創刊号に

寄せられた当時の大野實雄館長の巻頭言に「図書館は大学の心臓である、と言われておりますが、その機能を全うするためには地味な努力を積みかさね、好意ある奉仕を惜しまぬことと、図書、資料および図書館に関する研究に打ちこむことが必要であります」とある。これは読者諸氏に向けての言葉であると同時に、図書館員に向けてのメッセージでもあった。館蔵資料や図書館をめぐる様々なできごとについて自ら調査、研究し、その成果を積極的に発表する、そのための場として紀要は創刊された。それゆえ刊行当初の紀要は、当時の館員たちからの活発な投稿によって成り立っていたが、そこには早稲田大学図書館を支えている自負と責任が感じられる。

翻って近年の紀要を見てゆくと、資料翻刻研究が中心であり、それ自体は悪いことではないが、執筆者の多くが教員を中心とした学内外の研究者であり、現役館員からの投稿は決して多くない。館員からの投稿が減った理由としては、公私ともに多忙でとても資料研究に割く時間が無いという意見もあるだろうが、何より大きな要因としては、図書館員として直接館蔵資料に接する時間が減ってきていることがあげられるかもしれない。かつては司書職として採用され、特定の業務にながく携わり、精通していた館員がいたが、現在はそうした形で的人员配置が難しくなっている。個人的に研究を進めるにしても、業務の中で資料を目にするのとは大きな大きな違いがでてくる。図書館をめぐる環境はゆとりとはかけ離れた状況にあり、資料と対話し、

また図書館について研究する時間をとることが難しいのは今後変わらないだろう。それでも、館員には「図書、資料および図書館に関する研究に打ちこむことが必要」なのである。以前にくらべて一人一人の能力が劣ってきているわけではない。だからこそ、多くの館員が資料に興味を持ち、図書館のあり方について意見を述べたいと思ったとき、積極的な情報発信の場として、本誌は今後もその役割を果たしてゆきたい。

今回の目次を見ると、館員や元館員からの投稿が多くを占める結果となった。翻刻や目録が中心であり、それぞれについて今後一層掘り下げた研究が期待されるが、そのためには読者諸氏からのご意見、御叱正が必須である。皆さんの力で図書館、そして図書館員を大きく育ててほしい。（藤原記）

図書館紀要編集委員会

委員長 藤原秀之（資料管理課長）  
委員 久保尾俊郎（資料管理課）  
松尾亜子（資料管理課）

早稲田大学図書館紀要 第60号

二〇一三年三月十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

発行人 中 元 編集委員会 誠

印刷所 三美印刷株式会社

発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

〇三(三三三三) 四一四一